チュプキサロン 記録

Vol.1

2023 年 5 月 10 日(水) 14:00-16:30 @シネマ・チュプキ・タバタ シアター　参加者：12 名

テーマ　映像のない『音の映画』を観て話す

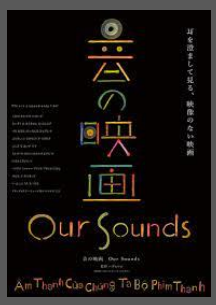
ゲスト　ハブ ヒロシさん（映画監督）

参加者へのメッセージ　“全編映像のない、音だけのドキュメンタリー映画作品『音の映画 Our Sounds』(2022 年)を上映します。監督のハブヒロシ氏をゲストに招き、お互いの感覚の違いについて知ったり、上映に際してのアクセシビリティのことなど、一つの作品から広がるさまざまな可能性について一緒に探究しましょう。”

『音の映画 Our Sounds』 https://our-sounds.webnode.jp/

えいぞう は ありません。まっくらです。
でも、あなた は いろんな ひとびと や
ふうけい に であうこと が できます。
ふしぎ な えいが です。

えいが の ぶたい は、おかやまけん の「にほんごきょうしつ」
ベトナム、ミャンマー、アメリカ、フランス、にほん、、、
みんな で あつまって
いっしょに うた を つくる
ドキュメンタリー・ミュージカル・フィルム です。



今年度、プレ LAND に参加するシネマ・チュプキ・タバタでは、「チュプキサロン」と名付けた対話の場を月に一度開催することになりました。映画上映におけるアクセシビリティや、ユニバーサルシアターが持つ可能性について、語り合いを通して探究していこうという試みです。
参加者には、シネマ・チュプキ・タバタの平塚千穂子や、ブラインド・コミュニケーターの石井健介と親交のある映画館経営、映像制作、メディア、舞台芸術、文化振興などの分野で、作り手や届け手として活動している方々をお招きします。

第 1 回のサロンでは、映画『音の映画 Our Sounds』を鑑賞し、監督のハブヒロシさんを交えて感想のシェアやディスカッションを行いました。この映画は通常、薄暗がりの中で上映しているということから、チュプキでは思い切って完全に照明を落としてみてはどうかとのアイディアがあり、参加者の了解も得て、暗闇の中で上映を行いました。石井がダイアローグ・イン・ザ・ダーク*でアテンドを務めた経験があったからこそできた実験でした。また、音だけの映画ですが、聴覚障害のある方とも映画を観る体験が分かち合えないだろうかとの期待から、ろうの方もお誘いし、別室でこの映画の字幕版を鑑賞してもらい、後ほど感想の共有をお願いしました。

このレポートでは、後半のディスカッションの様子を抜粋、編集してお伝えします。

*視覚障害者の案内により、完全に光を遮断した”純度 100%の暗闇”の中で、視覚以外の様々な感覚やコミュニケーションを楽しむソーシャル・エンターテインメント（公式 Web サイトより）

（構成・文：舟之川）

プロジェクト運営メンバー　平塚千穂子（シネマ・チュプキ・タバタ代表）/ 石井健介（ブラインド・コミュニケーター）
舟之川聖子（コーディネーター）/ 吉川真以（コーディネーター）

TURN LAND プログラム　主催：東京都，公益財団法人文化財団 アーツカウンシル東京，一般社団法人 谷中のおかって

一人ひと言、感想シェア

石井：まずはこの映画を観て、どんなことを思ったり感じたりしましたか？

参加者 a：きょう初めて暗闇の中で映画を観る体験をしました。盲導犬がつけている鈴の音がしてちょっと安心しました。わたしはダンスをやっているので、音楽が鳴ったら一緒に踊りたくなりました。

参加者 b：見えないぶん、いったいこの映画には何人の人がいるんだろうと考えながら観ていました。いろんな言葉を話す人が共存して一つのエネルギーを作っているんだなということを声で感じられました。

参加者 c：ほぼ真っ暗な状況に最初はドキドキしていましたが、だんだんと安心する気持ちも生まれて、新しい感覚でした。映画から聞こえてくる声に、勝手に自分の知っている人をイメージしたり、自分の好きな人を登場させて物語が進んでいくのが素敵でした。いろんな声や音が調和して音楽になっていくのを聞いていて、わたしも音楽をやりたくなりました。

参加者 d：観ている他の人たちの立てる音、たとえば息づかいのようなものにも意識が向きました。

参加者 e：わたしは普段映画を作っています。映像がないことで、「映画ってなんだっけ？」という根源的な体験をした感じです。それと、普段の生活では声や音でもジェンダーが規定されていると思っているのですが、この映画では映像がないことによって、一段解放される感覚がありました。自分の頭の中で何を描いてもいいのがすごく楽でした。こんなふうに、見る側と対象とのやり取りって常にぐらついているのだと思います。

参加者 f：実は自宅の一室に完璧に真っ暗になる空間を作って音を楽しんでいるので、音だけの映画にあまり驚きはありませんでした。音のない映像だけの映画『LISTEN』を観たときのほうが衝撃でした。

参加者 i：音を聞いてわたしがイメージしている、”外国から来た人たち”の像には何か偏見が入っているんじゃないかと、ドキドキしながら観ました。監督はどうしてこういう形式にしようと思ったのかに興味があります。

参加者 j：インタビュー音源の文字起こしに近い、馴染みのある感覚でした。お能の鑑賞にも似ていました。お能は、設定やあらすじはあるのだけれど、妄想力でいかようにも楽しく観られるという演劇なので。

参加者 k：最初は頭の中にビジュアルを描こうとしていましたが、途中で体の感覚が変わって、音楽と映画の中間のようになっていって、心地よかったです。

参加者 l：いろんなノイズや環境音を手がかりに、自分が何を観ているのかを探す感じが興味深かった。この感覚をろうの方にどう伝えたらよいかという問いには、作曲家で譜面を絵で表している人のことを思い出しました。

参加者 m：想像していたのとは違う体験でした。途中で映像にいちいち置き換えず、ありのまま受け止めようという感じになりました。いいなと思ったのは、違う国の人の言葉を聞こうとすると能動的に向き合わざるを得ないところが、この映画に対する我々の態度「これはどういう映画なんだろう？」と一致している点。映画一本通して音楽を作っていくプロセスと、これまでにない映画の文法で語っていくプロセスも一致していて、題材と作法がマッチしていた。

参加者 n：観るのは 2 回目です。場所や環境によって鑑賞体験は変わるんですね。音を音として感じられるのは、この映画がストーリーや意味に依存していない、音楽の映画だからかも。この映画を共有できない人はろう者だけではない。暗い中で観るのが難しい方、音声情報を処理しづらい方など。そういう方たちのためにもバリアフリー字幕はあると聞きました。

参加者 o：この映画は日本語という言語が軸になっていて、日本語の訛りも映画を構成する要素になっています。それをどのように字幕や手話など視覚情報で伝えられるのか。劇場という空間を使って、いろんな人と一緒に観る醍醐味をどうつくっていくかを考えていました。

参加者 p：エンドロールも文字ではなく、出演者本人が声を発していて存在感がありました。わからない言語が出てくると字幕がほしくなる感じが発動して、通常映画だと思っているものが、いかに固定概念で出来上がっているかに気づかされました。

参加者 q：優しい歌声や素朴な楽器の音に、山並みや足元に咲く花など、景色が見えてくるようでした。

参加者 r：これはダイアローグ・イン・ザ・ダークと同じで、見える人がギャップを楽しむ映画だなと思った。見える人が見えないことによって、今までの常識や概念が覆されるエンターテインメント。そこにモヤ

モヤしながら観ていました。この説明のない状況って僕の世界では普段使いなので。あるいはこれはドキュメンタリーというよりアートに近いのかもしれないね。

参加者 s：わたしはお芝居が好きでよく観に行くんですが、周りの人が笑ったら、誰かがふざけたのかなとか、ハッと息を呑む感じが会場全体にあったら、何か緊張したシーンなんだなとか。舞台の様子は見られないけれど、同じ劇場にいるから起こることが面白いなと思います。わたしは音声ガイドなしで観るのも好きで、終わったあとに一緒に観た人と、「あのシーンってどういうこと？」とか「こうだと思ったけど違ったんだ！」としゃべるのが楽しい。わたしにとっては、そういうすごく楽しい体験を思い出せる、とても素敵な映画だと思いました。

左から平塚、石井、手話通訳、参加者

字幕版『音の映画』

石井：僕も最初は「これは見えない自分の日常だな」と思いました。でも途中で、ドキュメンタリーの手法としてのノーナレーションだなと気づいてから、情報を少なくすることの豊かさを感じたんですよね。次に、字幕版で観ていた方、どうでしたか？

参加者 t：面白い体験でした。まずどんな字幕だったかを説明しますと、真っ暗なスクリーンに白い文字で言葉が書かれていました。上から日本語、ベトナム語、英語の順です。バリアフリー字幕ではなく、セリフ（人が話している言葉）だけが書かれている字幕でした。これだと今誰が話しているのか、何語を話しているかがわかりません。

字幕版の画面 ©金ノプロペラ舎

手話通訳が、「さっき話していた人とは別の人です」「今英語を話しています」と説明してくれて、少しずつ状況がわかりました。ただ、字幕には常に 3 つの言語が書かれているので、わたしが知らない言語であっても、日本語の字幕で内容がわかってしまいます。その点でもみなさんとはちょっと違う鑑賞体験だったかと思います。字幕情報の付け方には工夫が必要だと思いました。言葉の訛りの表現方法も工夫があったら、より伝わりやすいかもしれません。一つ、みなさんに質問があります。「この『音の映画』とラジオドラマは違うのか？」。

感想を受けて、監督から

石井：その質問はぜひあとでみなさんに聞きましょう。その前にハブさん、みなさんの感想を聞いてどう思いましたか？

ハブ：ありがとうございます。僕は何十回と観ていますが、こんなに映像を結ばなかった回はなかったのでびっくりしています。みなさんの中にもいらっしゃいましたよね。撮った自分でさえそうなのが不思議です。明暗、空間の大小、音量の大小なども関係することがわかりました。映画は観客によって作られるものですが、この映画はその極北をいっていると思います。観る人が自分で作っていく映画、観ている側が作者になれる映画です。それを狙って作ったわけではないのですが。

どうして音だけの形式で撮ったかについては、映画づくりを通してなるべく搾取したくなかったということがあります。僕は岡山県高梁（たかはし）市というところで日本語教室を開いていたんですが、そこに来るみなさんの話が衝撃的で。外国人技能実習生のことはニュースなどで取り沙汰されているので、ご存知だと思います。そういう話を聞いた僕として、かれらと映画を作ろうと思ったときに、カメラを持つというのがなんか適さな

かったんです。搾取につながるのではないかと。かといって音楽として消費されて終わるのもいやだった。音楽だけどカーラジオで聴くようなものではない、能動的に見ようとしないと見られない音の映画という形式が最善だと思いました。

字幕版については、これはアメリカの上映に合わせて、主に英語話者のために作ったもので、バリアフリー字幕として作ったものでありません。これは日本語のニュアンスの映画なので、日本語を解さない方に観てもらうのも難しさがあります。訛りの表現は、日本語を間違ってしまっているのを文字にすることにためらいがありました。ちょっと侮辱的、差別的ではないかということです。難しいです。

どの映画でもそうだと思いますが、絶対になにかしらの理由で観られない人が出てくる。そのときにどこまで共有できるのかは本当に挑戦だし、想像力をはたらかせて一緒に取り組んでいくという行為自体が尊いんじゃないかと思っています。

参加者からの感想に応えるハブさん（左から 2 人目）

ラジオドラマと、どう違うのか

石井：難しいけれども、考えたことがないことを考えるのは楽しいですね。ではさっきの質問、「この映画とラジオドラマとはどう違うのか？」を聞いてみましょうか。

参加者 m：わたしはラジオドラマの制作にも携わっているのですが、この映画とラジオドラマとはまったく違うものです。ラジオドラマは音声メディアでありながら、基本的には見える人のために作られています。見える人にわかりやすくイメージしてもらうための説明を入れます。聞いている人が誰であっても、ある程度同じような状況、同じようなキャラクターを思い浮かべられるように、音声、音楽、効果音で補足します。何か作業をしていても、運転中でも、ストーリーがちゃんと理解できるように作っていくので、説明はどんどん平易になっていきます。今日観た映画は、説明を省いて、真剣に向き合って観るような繊細さがあるという点で、やっぱりラジオドラマとは違いますね。

石井：普段、音声メディアに親しんでいる視覚障害の方々はいかがですか？

参加者 r：ラジオドラマは、情報がこっちに向かってきているんですよね。歩くこと、しゃべること、音楽、すべてが。だから安心感がある。この映画はアートなんだと思う。これが楽しめるかどうかはあなた次第だよということ。表現って大体暴力性を伴うもので、誰かを傷つけてしまう可能性がある。聞こえない人や見えない人、この映画の小さい幅に収まらない人すべてを傷つけている可能性がある。

参加者 s：以前ハブ監督が、「『Our Sounds』の“Our”を広げていく、上映する環境をいろいろ変えることで“Our”を広げていくことを目指していたんだけれども、逆に外側の人をつくってしまっているかも」とおっしゃっていて、それが印象的だったのを思い出しました。ラジオドラマとの違いで言うと、ラジオドラマではたとえば人が登場してきたら足音が入ります。コツコツコツ……それが男性の足音なのか、女性の足音なのかをヒールやスニーカーなど、かなり露骨な属性の表現をします。一方で、この映画ではたまたまマイクが拾ってしまったノイズがたくさんあります。ラジオドラマや劇映画ではなんの意図もされていない音が入ることはまずない。そういう点でも、この映画はドキュメンタリーだなと思いました。

作者の意図

石井：必要な情報やほしい情報はみんな違う。誰かにとって必要な情報や環境が、誰かにとっては鑑賞体験を損なってしまう可能性もある。そのあたりも踏まえてユニバーサルにしていくって難しいと思うのですが、平塚さんはどう思いましたか？

平塚：その話の前に確認しておきたいことがあって。わたしたちが音声ガイドをつくるときにすごく気を遣っているのは、「作者のどんな思いがこの表現方法を選んだか」ということなんです。わたしが知りたいのは、ハブ監督の「搾取したくなかった」という思いです。何をもって搾取としているのか。それをしっかり共有しないと、聞こえない人にどう伝える手段がありえるのかには向き合えない気がします。

ハブ：まず僕がなぜ映画を作ろうと思い立ったかというと、もともとコロナ禍で僕もみんなも苦しい状態にいたときに、一緒に自分たちの楽しい日常を取り戻したかったというのが出発点でした。それを映画を通してやりたいと。そして作るなら、「これは僕たちの映画だ」と言えるようなものにしたかった。かれらはニュースで目にするような姿だけじゃない。弱くない。大変だけどそれだけじゃない。一緒に楽しめる存在だ。そんな僕たちの出会いを祝福したいという気持ちがありました。そういう中でかれらにカメラを向けると、僕は一緒に生きることが難しくなるというか。駒として使ってしまうのを避けたかったんです。

石井：ありがとうございます。時間がきてしまったので、続きは次回のサロンで。今日はハブさん、みなさん、ありがとうございました！

（終）

サロン終了後も活発な意見交換を行う参加者たち

後日振り返り

vol.1 の後、参加者にアンケートを実施しました。それを元に運営メンバーとハブ監督とで振り返りの機会を設け、次のことを確認しました。

■ 暗闇で観るという演出を施したことで、見えて聞こえる人の感想が「視覚を遮断されたことによるギャップ体験」に集まってしまい、見えない人や聞こえない人に疎外感を与えてしまった。

■ 監督は映画制作の段階で、この映画を目の見えない人や耳の聞こえない人に見せたいと積極的に考えていたわけではなかった。それは作品に暴力性があることを意味しない。誰を対象者として招待するか、どのような問いを立てるかを検討していなかった。監督と運営チームの顔合わせも事前に行っていなかった。

■ 監督がこの作品でカメラを使わなかった理由は、「映画が映像を前提としていることを問い直したかった。映像があると同じものを観ていると思いがちだが、実際は全然違うものを観ている。映画とは何かを原初的な芸能のレベルにまで遡って考えてみたかった」ことや、「素人にカメラを向けたときの不利益はさまざまあるが、特に技能実習生という立場上、顔を出さない方がかれらを守れると考えた」とのことだった。音のみの形式を採用したこれらの意図についても、事前の打ち合わせて理解した上で、参加者とも共有しながらサロンを進行する必要があった。

次回もハブ監督にご参加いただき、引き続きみなさんと対話することにしました。参加者のみなさんには、お詫びと共に、振り返りの内容まとめを送りました。

（構成・文：舟之川聖子）